

伴奏譜を弾く最初のステップに関する実習と考察

— 保育者を目指す初心者のための —

富山 律子

Practice and Consideration on the First Steps to Playing Accompaniment

— For Beginning Students Aiming to be Childcare Professionals —

Ritsuko Tomiyama

Abstract

In two years, students at Sakura no Seibo Junior College hope to improve their piano playing ability and to make use of it at their future jobs. While playing the piano, one must place their fingers correctly before singing a section. Even though beginners can sing, they often stop in the middle of a song due to a mistake in playing the piano. The author believes this is because the student's fingering is not yet decided. Therefore, as a first step when reading a score, it is efficient practice for students to make themselves aware of the fingering. In addition, it is necessary to conceive simple chords that match the melody in the exercise and to be able to play them in the future. This is a practical consideration and training technique for beginners.

Key words : piano, beginners, musical score, fingering, sing and play

1. はじめに

保育の現場において歌は欠かせないものであり、保育者を目指す者は、日々の生活の歌、様々な場面で用いられる曲の伴奏や弾き歌いができる能力を身に着けなければならない。そして、越川、高木は「現場ではピアノに対する苦手意識の有無によって、日々の保育に少なからず影響が及ぶ。ピアノが得意な担任のクラスは音楽が溢れているのに対して、ピアノが苦手な担任のクラスはピアノの演奏を避けてしまう傾向にあるため、歌声に活気がない」¹⁾と述べている。

ピアノを弾くために、基本は大切である。一般的なピアノ指導の導入期のレッスンにおいては、運指のルールが身につけていないので、まず楽譜に書いてある指使い通りに弾くことから始める。そのために、指の訓練のための数多くの練習曲があり、決められた指使いで弾くことで演奏技術を高める指導がおこなわれている。

保育者に求められるものは弾き歌いであるが、歌の伴奏譜に指使いは書かれていない。歌と共にピアノを弾く技術を身につけなければならないが、その場合も効率的な練習の第一歩は、自分に合う運指を決めて練習することである。

実際に弾き歌いを子どもの前でおこなう場では、状況に合わせた臨機応変な対応が求められる。例えば子どもが歌いやすいように、前奏の最中で歌い出しの声掛けをしたり、歌詞が出てきやすいように次の歌詞の先読みをしたりするなど、子どもの様子を見て様々なことに気を配りながら伴奏をおこない、鍵盤や楽譜を確認する時間は僅かしか

い。弾き歌いには、ピアノを演奏するだけの場合とは違った技術が必要であるが、まず学生は、確実に指が次の鍵盤へ向かう譜読みの仕方、練習方法を習得することが学びの第一歩であると考えた。

2. 学生の現状

現在、こども保育コースで受け持つ1年次の学生9人の中で6人がピアノ初心者である。学生は皆、保育者になるという明確な目標がある。ピアノを上達させて少しでも多くのレパートリーを持つために練習に励んでいるが、その向上心を持続させるためには、練習すれば弾けるようになったと実感する体験を重ねることが大切である。学生にとって歌う事は、音域の問題や声の出し方に課題はあってもピアノを弾くこと程難しさを感じていないように見受けられ、それによって学生のおこなう弾き歌いの場面では、歌詞や歌の音程は正しく先に進んでいるにも関わらず、ピアノの弾き間違いによって止まってしまう状況がたびたび起こる。

4月にレッスンが始まった時に、楽譜へ音符の音読みを書き込むことはあっても、指使いを書く学生はいなかった。そのために、まず初めに、指に番号があることを教えた。そして、歌の伴奏譜には指使いは書き込まれていないが、指使いを決めることが大切なこと、時間がかかっても自分に合う指使いを自分できちんと決めて譜面に向かうことが上達の近道であることを説明した。しかし、大切であると理解が出来ても、自分ではどう決めていいのかわからないという現状であった。

3. 研究目的

演奏した時に指がその音（鍵盤）にいかない原因は、指使いと鍵盤の位置関係への認識不足である。そして、メロディーや和音に合う指使いを決める作業は、曲の難易度に関わらず必要不可欠である。運指を教えることは簡単だが、自らが意識して取り組むことが今後に役立つであろう。いろんな指を使い無駄の多い練習を重ねるのではなく、読譜の最初の段階で自分にあった指使いを早く見つける意識をもち練習に取り組むことが、今後多くの伴奏譜を弾く為の着実な歩みであると認識させることが第一の目的である。

また、伴奏譜があっても難しいと感じる時、練習の場だけでも簡単な和音に変えて弾くことができる能力を培うことを第二の目的とする。

したがって本稿では、ピアノ初心者の学生が、どのような曲であっても、①どの指使いを使うと弾きやすくミスなく効率的に弾けるかを発想する視点をもって、読譜を始める力を養うと共に、②基本的な伴奏形を習得し、旋律のみの楽譜へ自ら伴奏を付ける能力を身に着けるための有効な指導方法について考察する。

4. 研究方法

こども保育コース1年の学生9人に対して、まず1度目のチャレンジとして、ハ長調の簡単な曲の楽譜を用い4回のレッスンの中で実施した。レッスン時間の最後の5分間をこの課題の実習にあてた。そして、ピアノを弾く技術、知識の程度を図るため、ピアノ経験者、初心者の受講者全員に同じ課題をおこなった。

1回目では、最小限の回数でのポジション移動により、鍵盤に置いた手の位置を極力替えずに弾くことを前提として、自分が最も弾きやすい指番号を楽譜に書き込む課題を出した。

2回目のレッスンでは、その楽譜を基に旋律のみの弾き歌いを実施し、本当に弾きやすい指運びか、また、書いた指番号をきちんと意識し守っているかの確認をおこなった。その後、音やリズムについて何の条件も与えずに伴奏付けを試みた。最後に、調性と主音を確認し、調の主音が根音となるIの和音、主音から数えて4番目の音が根音のIVの和音、5番目の音が根音のVの和音の主要三和音について、それぞれの基本形と転回形を示し、これら3つの和音のみを使って旋律に合った伴奏を楽譜に書き込む課題を出した。

3回目のレッスンで、伴奏を付けての弾き歌いを実施し、指使いは正しく使えているか、旋律に合った和音を選択できているか、音が合わない場合どのように正しい音を見つけるかなどの作業をおこない、これまでの手順を踏まえて自宅での課題として「夕やけ小やけ」の楽譜を配布。

4回目のレッスンでは、弾き歌いを実施し、指使い、伴奏付けについての学生の理解の度合いを図り感想を聞いた。さらに2度目以降のチャレンジは、通常の教材を用いて、次回のレッスンに個々のレベルに応じてチェックポイントを確認していく実習をおこなった。各回とも短い時間ではあるが、継続することが必要であると考えた。

5. 結果と考察

• 運指の認識

「おつかいありさん」指使いA…譜例1

2で始める

指を返し3を持ってくる

あ ん ま り い そ い で こ っ つ ん こ あ り さ ん と あ り さ ん と

休符

1に移動

音を切って演奏

2に移動

こ っ つ ん こ あ っ ち い っ て ち ょ ん ち ょ ん こ っ ち き て ち ょ ん

ピアノは、鍵盤の上でポジション移動を常におこないながら演奏する楽器である。離れた場所へ指を移動させて弾いたり、弾き終わった音に置かれている指の上から次の音のための指を持ってきて指を返したり、下から指をくぐすことを何度もおこなう。指が届く近い場所であれば、その指替えを繰り返すことで長い旋律を繋げて一つの流れで弾くことが可能となる。

指使いA（譜例1）では、まず2の指から始め、6小節目で1の指から3の指へ返し、「あっちいって」（9小節）以降、置いた指の形を変えずに弾くために2回ポジション移動をおこなっている。手の場所を変えずに弾けるフレーズを抜き取れば指の運びに問題は見られない。しかし全体を通して演奏すると「あっちいって」（9小節）から起こる1の指や2の指への移動の際、その直前が休符であったり音を切っていたりする理由から、指を返す方法ではなく手の位置を次の鍵盤位置まで移動させるため、移動と音、双方でミスが目立った。学生の中には、移動をおこなわないまま「あっちいって」（9小節）を3の指と5の指で弾いてしまい、「ちよんちよん」（10小節）では指が足りなくなったため再度5の指で弾く者もいた。

学生は皆、自分が書いた指使いへ注意を向けて弾いており、6小節目での指を返す動きはスムーズにおこなう者が多かった反面、手の位置を移動する際には一度止まって指番号や鍵盤位置を確認する様子があった。

「おつかいありさん」指使いB…譜例2

指使いB（譜例2）では、3の指で始まり、5小節目の頭のラ音に5の指を移動することで、それ以降最後まで手の位置を変えない演奏が可能となっている。「いそいで」（2小節）や最後の「ちよん」（12小節）を弾く為に指を開くこと、5小節目で確実に手の位置を移動することに注意がいる。始まりの音のソ音に3の指を使うため、5の指は初めシ音の上に配置されており、2小節目のド音を弾く為には5の指を開かなければならない。曲を弾き始める前や、移動の直前に目で確認する学生と、問題の箇所にて初めて気づき、移動に時間がかかったり、正しい音を弾くために弾き直したりする学生に分かれた。5小節目の5の指への移動は9人中6人の学生が選択したが、2小節目で5の指を開いて弾く動作をおこなう際と同じく1回目でできた学生はいなかった。弾きながら移動後の鍵盤の場所を確認していた学生も、目で見える時間が僅かなため、確実にラ音に指を置くことが難しそうであった。5小節目で5の指への移動を忘れて弾き続けてしまうと、譜例1のように6小節目で指を返さないと次の音を弾く指が足りない状況になる。譜例1と同様に手の移動の課題に加えて、旋律を弾くために指を開く動作にも問題があることが解った。

上記の2通りの指使いは、学生が記入したものを基に作成した。譜例1と譜例2で大きく違う第一の点は、始まりの指使いである。2の指か3の指かで選択の割合は半々であったが、3の指の方が鍵盤に置いた時の自然な手の形で弾き始められる。しかし、この場合は2の指で始まるのが最適だと考える。その理由は、弾く前に2の指と1の指を開いてソ音とミ音に置けば、1段目のほとんど全ての音に指が配置され、弾くだけの状態になるからである。3の指で始めた学生も、2小節目の初めの音がド音であること、5の指を使うことは理解していたが、1小節目を弾いていた時に使っていない他の指が今どの位置に配置されているのかには考えが及んでいない。楽譜を見ると、3小節目と4小節目の頭のソ音には、譜例1、譜例2共に2の指を使用している。途中で指を開く動作を入れるよりも、始まりのソ音から2の指を置く方がミスなく弾ける可能性が上がると考えられる。

第二の点は、5小節目のラ音に5の指を持ってきてポジション移動を選択するか、6小節目に指返してポジション移動をおこなうかという点である。5の指に替える指使いをミスなくおこなうためには、移動前に次に使う指を次の鍵盤の上に準備しなければならない。4小節目にソ音を2の指で弾いたらすぐに、その指の近くまで5の指を近づけ、次のラ音の上に用意しながら、他の指も同時に移動させるという動作だ。そうすれば、それ以降の鍵盤上に指が全て配置され確実に弾くことができる。指返して弾いた方が易しく感じられるが、こちらは指を返す前に先の旋律を見越してかえる指を決めないと、使える指が足りなくなり短いフレーズで何度も指をかえなければならなくなってしまう。譜例1では、6小節目は指返してのポジション移動によってミスタッチは少なかったが、9小節目以降の移動で課題が見えた。それは次の音を弾くぎりぎり移動をおこなうために起こるものであり、休符の間や音を切って弾いた後すぐに、手の位置を移動させる練習の指導をおこなった。

ピアノを弾く際には、使っていない指も常に鍵盤に触れた状態で弾くことが望ましい。そして、移動して弾く際には、音を弾く前に、その音を弾く指が鍵盤に触った状態で用意されていることが好ましい。この曲は1オクターブ内

で旋律がなされているため、手を鍵盤から大きく離しての移動はせずに弾くことが出来る。旋律の音が隣り合っていないくても、指返しや指くぐしと同様の作業で指を準備することが可能である。そうすることで弾き間違いは減り、スムーズな演奏へと繋がる。

以下に、指使いA（譜例1）、指使いB（譜例2）でおこなう指の動きをまとめる。

指使いA では、演奏前に鍵盤に手を配置する際、1の指と2の指を開いてミ音とソ音に置き、①1小節目2拍目のミ音を弾いた後、1の指は2の指へ近づけておく。②6小節目で、1の指（ファ音）から3の指（ミ音）に返す時、1の指を弾いている時に、3の指を1の指の上から返してミ音の上へ持ってきて用意して弾く。③9小節目で1の指（ミ音）に移動する際は、直前の2の指（レ音）を弾いた後に、1の指を2の指の下からくぐしてミ音の鍵盤を触った状態で用意し、1の指（ミ音）を弾くと同時に2の指をファ音の上に移動する。次の音であるソ音は自然と3の指で弾く。④11小節目の移動の際は、10小節目で4の指（ラ音）を弾いた時に1の指は、ミ音の上に配置されている状態なので、4の指（ラ音）を弾いた後すばやく、1の指を支点として、その上から2の指を返してレ音の鍵盤の上へ指を用意し、弾く。

指使いB では、①1小節目のソ音を3の指で弾きながら5の指を開いてド音の上に用意しておき、弾く。②ド音を5の指で弾くと同時に、4の指をシ音に移動させて次の音を弾く。③4小節目のソ音を2の指で弾いた後、その指の近くまで5の指を近づけ、次のラ音の上に用意し、④他の指も同時に5の指の準備の動きに応じて移動。⑤11小節目2拍目のレ音を弾いた1の指を、4の指がソ音を弾いている間にすぐに広げて、ド音に準備、12小節目のド音を弾く。

「おつかいありさん」指使いC…譜例3

あ ん ま り い そ い で こ っ つ ん こ あ り さ ん と あ り さ ん と
こ っ つ ん こ あ つ ち い つ て ち ょ ん ち ょ ん こ っ ち き て ち ょ ん

指使いC（譜例3）は、普段のレッスンで2の指を避けて、3の指や4の指などを多用する傾向がある学生が書いたものを基にしている。手の位置を極力変えずに弾くことを意識し、自分が弾きやすい指使いを考えた様子がわかる。5小節目のラ音への移動は4の指を使うことでミスがなかったが、他の箇所でも何度か躓きがあった。

指番号を見てみると、使い終わった指の近くにある指で次の音を弾いている。例えば7小節目から10小節目の枠で囲った指使いは、6小節目の最後の1の指（ミ音）から3の指（レ音）に返した後、4の指（ミ音）、3の指（レ音）と続き、9小節目でまた4の指（ミ音）に戻ると、4の指（ミ音）と5の指（ソ音）を広げて弾き、続けて3の指をミ音に移動して3の指（ミ音）と4の指（ソ音）を広げて弾くといったものである。この学生には、これまでもレッスンの最中に、効率よく全ての指を使って弾くことを指導している。今回、指使いを書き込む為に少しずつ弾き、その場その場で鍵盤の上に乗っていて持ってきてやすいと思われる指の番号を書いたのではないかと推測されたが、実際確認しながら弾くと、偶然ではなく彼女にとって自然に鍵盤に向く指であり、自分が弾きやすい指使いを書いていた。間違っていないが、練習曲による指の訓練と共に、楽譜を通して弾いた時に楽に弾ける指使いを考える視点を持たせる指導が必要であると感じた。

実習中の学生の声

- 手を鍵盤に置いたままの指使いになるように気を付けた。
- なるべくぎりぎりまで手を動かさずに弾ける指使いを考えて、弾けるかどうか確認してから書き込んだ。
- 指かえをする時は、間違いにくく持ってきやすい指はどれかを考え指使いを決めた。
- 指をかえる時、手を離して持ってくる移動は鍵盤の位置や指番号も間違いやすいため、近くの指でかえるようにした。
- 自分で指使いを考えられることが分かった。

• 主要三和音による伴奏付け

曲を譜読みするうえでも重要である調判定については、調号を理解している学生とそうではない学生がいるため、曲の最後の音を見て判断する方法でおこなった。転調がない場合、調の主音で曲は終わるため、この曲はド音が主音であることが解る。ドレミファソラシドの日本式表記であるハニホヘトイロハは全員が理解しているので、ド音から始まるハ長調となる。一般的に、Iの和音、IVの和音、Vの和音は主要三和音と呼ばれ、どれかを当てはめれば簡単な伴奏が可能である。和音の連続なので、基本形だけでなく転回形も用いて、同じ構成音がある場合は手の位置を動かさずにそのまま使うこと、なるべく隣り合った音で移動をすることで運指が楽になることを前提に課題を出した。

「おつかいありさん」伴奏付けA…譜例4

伴奏付けA（譜例4）は、2回目のレッスンで3つの和音を提示後におこなった3回目のレッスンで最も多くの学生が書いてきたものであるが、2回目のレッスンで和音提示前に試みた際には、伴奏付けをおこなえた学生はゼロであった。旋律の始まりの音に、どの音を合わせて始めればよいのかが解らない様子であり、コードネーム付きの楽譜で伴奏を付けることに苦手意識のない学生も、自分で合う音を見つけて伴奏することはできなかった。そこで、伴奏付けの第一段階としてまずは、旋律と同じ構成音のある和音を選ぶと同時に、左手の和音の動きを近い場所でおこなうことを優先して和音進行を考えることを伝授した。旋律にある音符が用いられている和音を当てはめていく作業へ変えることによって、9人中8人の学生が、音価の違いや細かな和音選択の違いはありつつも、旋律に合った伴奏付けができるようになった。譜例4は、和音進行が近い場所でなされているため左手の動きがスムーズである。

「おつかいありさん」 伴奏付けB…譜例 5

伴奏付けB（譜例5）を考えた学生も、指示通りに基本形と転回形を組み合わせているが、音域に高低差が生じることによって手の場所移動を頻繁におこなわなければならない、聞いた印象が落ち着かない。

伴奏の和音は旋律の音をヒントに決めるので、曲の始まりであるソ音に対しては、同じソ音が入っているIの和音か、Vの和音が考えられるが、伴奏付けBでは、Vの和音が配置されている。音楽を専門にしている者にとって、特に簡単な曲の場合、曲の最初と最後は主和音（Iの和音）であることは常識であるが、ピアノ初心者にとっては迷う音になることが解り、曲の始まりの旋律でIの和音かVの和音で迷った場合、Iの和音が自然であることをきちんと説明する必要があった。

「夕やけ小やけ」 伴奏付けとポジション移動の回数…譜例 6

「おつかいありさん」の実習での手順を踏まえておこなった「夕やけ小やけ」の楽譜では、譜例6の指使いが多く見受けられた。伴奏は和音を置くだけではなく、分散和音も用いている。5回のポジション移動がおこなわれ、4回目の移動の際、直前のミ音にある1の指に5の指を近づけてソ音へ準備する必要がある他は弾き終わった指の近くで指を替えている。譜例6以外の指使いで弾いていた学生も含めて、前回に比べ弾き間違いが減った。主要三和音のみでおこなうことで伴奏付けに対する困難さや苦手意識は解消された様子がある。指使いも、通して弾く際に間違いにくいものを選ぶということに注意する意識が生まれた。

実習中の学生の声

- 旋律を見て、同じ音を探して和音を当てはめたため伴奏付けに難しさはなかった。
- 3つの和音だけで伴奏が付けられることが分かった。
- 最後の和音と最初の和音が同じになるように気を付けた。

5. まとめ

指返しや指くぐしの利点は、弾き終わった指を支点にして動く為、鍵盤位置の確認がしやすくミスが起こりにくい所にある。普段のレッスンでは、ほぼ全ての学生がこの指替えで最後まで旋律を繋げている。

今回の課題をおこなったことで、学生にとって「指使いを考える」ことと「指使い通りに弾く」ことは違った思考回路でおこなわれていることが解り、困難さが見えた。しかし、ピアノ経験者、初心者にかかわらず「指使いを考えて書き込む」という過程を通して、それぞれが自分に合う効率の良い指使いを考えることの大切さを理解し、実践のために努力する姿を見ることができた。

「書き込む」作業において、ピアノ歴が浅い学生ほど、手の位置を変えずにぎりぎりまで弾き続けられる指使いを考え、逆に、幼少期にピアノを習った経験があり、この譜面の指使いを考える作業が簡単だと感じる学生には、譜例1の9小節目以降のような短いフレーズでのポジション移動が多く見られた。この違いは、前提として指示された「鍵盤に置いた手の位置を極力替えずに弾くこと」に対する捉え方の違いにある。「置いたままの手の形」が意味することは、脱力して自然と置かれた指の状態で弾くということだけではなく、鍵盤に向かう手首の位置を変えずに弾くことであり、そのためには旋律の流れに沿って指を開く動作が伴われる。そして、開けば届く少し離れた音を弾く際は、弾く前に準備しなければならない。初心者にとって、位置を替えないでおこなう自然な指運びとは、指の開きを伴っても手首の位置を変えないことであり、同じ指示でも、経験者が捉えるその言葉への印象は、手首の位置ではなく、指の形を変えないことのみを優先するというものであった。

指使いを書き込む際に気を付けた手の位置や指の位置については、きちんと守れば実際に弾くときに、演奏を楽にするための手助けとなる。学生には書き込んだ指使いを正しく弾こうとする姿勢が見られたが、弾き直しや、移動のための確認作業により止まる場面が多かった。楽譜上で弾きやすい指使いを考えることは概ね出来ているが、実際の指運びや手の移動に課題が見えた。特に初心者の学生は、まだ練習を始めたばかりの状態だと、旋律を全ての指を使って手を動かさずに弾くのではなく、使いやすい指ばかりで旋律を続けようとする者が多かった。

鍵盤上での手のポジション移動は、ピアノを弾く際に頻繁に起きているものであり、その場で気付くのでは遅い。そのため、曲の流れに応じて弾く為には、曲の最中どこで移動が必要なのかを演奏前に分かっているべきで、移動前の僅かな時間で指の準備をしなければならない。ピアノ経験者の中には、演奏中、次の音を弾く為指を準備することや、先に移動して指を配置しておくことなどの注意を受けたことのある学生もいるであろう。しかし、大学に入ってからピアノを始めた学生にとって、弾く前に次の指を移動して鍵盤へ用意する動作は大変な作業である。しかし、意識的に練習を重ねることで、音の流れに沿ったポジションを取ることが自然にできるようになるのである。

上記に示した学生の指使いは、どの指使いも次の指を事前に配置することで、きちんと弾くことが可能であり、書かれた指使いが間違っているわけではない。では、良い指使いとは何なのか。鍵盤に指を置いたら、しばらくは配置された指順のまま弾ける指使いが良い指使いであり、その状態で出来るだけ長く旋律を弾くことによってミスタッチを減らすことができるのである。実習をおこない、譜読みを始める第一段階で、移動が少なくすむ指使いを探そうとする視点を持つことができるようになった。また、長いフレーズを同じ手の位置で弾ける指使いになるように考える学生が増えた。

伴奏付けでは、完璧ではないが、旋律に合わせて和音を当てはめることができおり、同じ和音でも分散和音を用いるなど、変化をもたらすための工夫が見られた。今回の実習では、3種類（主要三和音）の和音が伴奏の基本であることを体得することを目的としたため、和声進行の細かな指導はおこなっていない。さらに課題を継続し、学生が主要三和音を使っている伴奏に慣れる経験を深め、和声進行や転調に取り組むことで、どの調であっても簡単な伴奏を付けての演奏ができるという自信につながると考えられる。

学生からは、「簡単な曲であっても、弾き間違いを減らすためには、置いたままの指使いを決めることが大事だと思っ

た」「指使いを考えることはできるが、弾く時に目が音にばかり向かって指使いまで見えていないことに気付いた」「音符を追うだけではなくて、決めた指使い通りにきちんと弾く練習をしなければいけないと思った」などという言葉が聞かれた。

ピアノ初心者が、弾き歌いをするのは簡単なことではないが、ピアノ演奏の基本である指使いの視点から読譜を行うことは、個々の着実な練習方法となる。そして、左手の伴奏譜が難しい場合に、旋律に合う基本的な和音を入れることができるハーモニー能力を高めることが、苦手意識を持たずに弾き歌いをこなすための有効な指導方法である。

この実習を重ねることで、初心者でありながら応用力を発揮する学生が出てきたことは、大きな喜びであった。それは、読譜の能力が高められるとともに、楽譜を見る「目」だけではなく「耳」が育ち、響きを音楽として聴けるようになったことに他ならない。伴奏譜を弾くための最初のステップは、自らが進んで歩む能力があることに気づかせることである。これは、そのための自立心を促す指導法の一考である。

文 献

- 1) 越川・高木 (2018) 「本学におけるピアノ指導の授業設計——保育士の経験を踏まえて——」千葉経済大学短期大学部研究紀要第14号, 73~80
- 2) 竹下則子 (2017) 「保育者養成校における歌唱指導技術の育成——声掛けや先読みの技術取得について——」京都聖母女学院短期大学学術紀要第46集, 89~99
- 3) 竹下則子 (2017) 「保育者養成校におけるピアノ伴奏技術の育成——子どもに視線を送りながら伴奏する技術について——」びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部 外部連携センター年報2017年No.4, 67~74
- 4) 仲嶺まり子・藤田光子・阿部えつ子 (2016) 「こどものうた弾き歌い指導における進度別教材の活用に関する一考察——こどものうた簡易伴奏集作成を通して」別府大学短期大学部紀要第35号, 79~89
- 5) 絹川文仁 (2018) 「保育における表現指導についての一考察——こどもの歌の成立過程やエピソードを鑑みた教育的姿勢についての論考」桜の聖母短期大学紀要第42号, 79~91
- 6) 長谷川美香 (2018) 「保育者としての資質を高める実習指導の検討——学生の実態と授業実践を通して」桜の聖母短期大学紀要第42号, 105~117
- 7) 狩野奈緒子 (2018) 「保育参加観察を通して保育内容を対話的に学ぶ——エピソード記述とドキュメンテーションの活用」桜の聖母短期大学紀要第42号, 141~155
- 8) 小田切舞美・篠崎智・山本優子・山下彰子 (2018) 「保育者養成課程におけるコードネームによる弾き歌いの学習——保育の視点からの考察——」東京家政大学教員養成教育推進室年報第5号, 83~90
- 9) 藤田光子 (2018) 「歌唱学習に対する意識と継続的指導の過程から——保育者・教育者養成校における調査より——」別府大学短期大学部紀要第37号, 105~111